

デ・レーケ と富山

前回ご紹介したように、デ・レーケは、最初に富山を訪問した1891(明治24)年8月、常願寺川を中心に、神通川も半日調査し、改修方法と問題点を述べたが、具体的な提案はしていなかった。

その後、デ・レーケは常願寺川の改修工事にかかりきりとなり、通算190日余りにわたって、直接工事を監督・指揮した。

1893(明治26)年3月、常願寺川改修工事はほぼ竣工し、現在の土木部長に相当する役職で勤務していた高田雪太郎技師は、神通川の改修計画を進め、1895(明治28)年5月に上京した折に、

デ・レーケに相談し、内務省土木局で再度富山への派遣を要請した。それが聞き入れられ、同年8月1日から12日まで富山を訪れたということは前々回すでに述べた。

デ・レーケが到着した直後の

8月3日夜から富山県下は大雨となった。神通川は増水し、27町村に被害がおよび、浸水家屋は1010戸に達した。このため、デ・レーケは神通川を視察することとはほとんどなく、4日間ほど高田と改修工事について打合せを行い、3ページにわたる改修計画の報告書を作成して帰京した。その要旨は次のようなものであった。

1895(明治28)年7月29日に記録した流量70,000(m^3/s)は現河道で流過させ、過去最大流量を記録した1891(明治24)年7月の1,118,000(m^3/s)との差の41,800(m^3/s)は、

富山市街地を北西部に位置する屈曲部(当時、神通川は蛇行していた。その名残が松川)の堤防を切り開いて分流路を設置する。

1895(明治28)年10月31日、高田技師は徳久知事に同行して、災害復旧のための国庫補助金申請と神通川改修計画の説明に内務省へ出張した。知事は神通川改修を実現するために内務大臣に直接面会して専門家の派遣を要請した。ところが、この時派遣されたのは、デ・レーケではなかった。

11月28日、古市公威技監らが名古屋から飛騨地方を縦断しながら富山市に到着。翌日から数日間、神通流域の視察をして、帰京した高田技師は内務省の指示に従って改修計画の設計・積算を行い、12月7日に再度内務省で古市技監を交えて計画の打合せを行い、許可を得て、富山に帰った。⑥